



学校だより

かけ橋

パート V

横須賀市立汐入小学校 校長室

2016. 3. 1
No. 24

元気でやりぬく子
すすんで学ぶ子
思いやりのある子

最後の懇談会

3月3日（木）に今年度最後の懇談会が行われます。当日は、担任から1年間を振り返っての話と来年度の連絡等があります。また、先日行われたお別れ集会の様子もビデオで流します。

お忙しいとは思いますが、ぜひご参加ください。担任も1年間がんばりました。もし、どうしても都合がつかない場合は、連絡帳やお手紙で1年間を振り返っての保護者としてのお気持ちを知らせていただけるとありがたいです。

どうぞよろしく願いいたします。

「親になる」ということ

ある雑誌に、上のような表題の文が載っていました。大学の心理学の先生が書いたものです。なるほどと思う部分があったので、ここでご紹介します。

親子関係のよしあしは「子どもが不快感情を抱えているときに、親の顔を見ると安心するという関係性が構築されているかどうか」で見極めることができる。そのためには、「**子が親を気遣う**」のではなく、「**親が子に気遣う**」関係性が必要である。

たとえば、「子どもが学校に行きたくない」と訴えた場合、親としては、最近の子どもの様子や体調その他もろもろの日常生活の流れを踏まえて、「今日は休もうか」または「ぐずぐず言わないで行きなさい」と判断する。そこには、「子どもの安心安全」を考えた「親が子に気遣う」関係性が見え

る。しかし、親が「自分の安心安全」を考えている場合は、面倒なので、「ぐずぐず言わずに行きなさい」と即答する。さらにぐずぐず言っていると、それに耐えられなくなり、「休んでいい」という。それは、子を気遣っての判断ではなく、親自身がいらいらしたり、不安になったりしないための判断になる。結果は同じように見えても、子どもは、その違いを感じ取るのである。

子どもの欲求にひれ伏してしまう親子関係は、一見子どもを大切にしているように見えるかもしれないが、子のぐずりによって自分が不快になることを無意識に避けようとすることから生じる対応であり、親が「自分の安心安全」を優先している行為なのである。

「親になる」ということは、「子の安心安全」を中心に思考し行動できるようになることである。わが子が何をつらいと思い、悲しいと思い、いやだと思って毎日を過ごしているのか、そこに目を向け、解決できないその思いとともに留まることができると、子は親の顔を見ると安心することができるようになり、前に進む力を得るのである。

これを読み、改めて「親になる」ことの奥深さを感じました。また、「教師になる」ということにもつながる内容だと思います。こういうことを自覚していることが、変化のための第一歩です。日々、子どもたちの心の声に耳をかたむけて、それを踏まえて大人としての判断をしていきたいと思っています。

親の心得について、ある臨床心理士が言った次のような言葉があります。

「乳児には肌を離さない、幼児には手を離さない、少年には目を離さない、青年には心を離さない」一気に離すのではなく、徐々に離していくことが大切です。また、その子の発達の様子によって離すタイミングが違います。だからこそ、わが子の成長の様子をよく見ておく必要があるのだと思います。